

木材加工をベースに機械加工の可能性を拡大し

新しい日本の
モノづくりを提案する

Machining JP
CORE

新産業メディア

マシニングコア

2012年 6月号





廃棄物処理の最新技術が一堂に 被災地の災害廃棄物処理へ提案多数 木材処理への提言も

廃棄物処理の関連技術を一堂に紹介するNEW環境展は5月22日から25日までの4日間、東京・江東区の東京ビッグサイトで開催し、東日本大震災で発生した大量の災害廃棄物処理に有効な機器等を中心に最新技術を紹介して活況を呈した。

NEW環境展は1992年（平成4年）に環境保全と再資源化をテーマに廃棄物処理展として初開催、2000年（平成12年）に現在の名称（略称はN-E X P O）に変更し、今回は21回目になった。昨年の前

回は会期2ヵ月前に発生した東日本大震災の影響を大きく受けたが、廃棄物処理は復旧・復興の起点となる技術だけあって最新技術に意欲的な来場者で会場には活気が戻った。復興庁の資料（2012年6月11日）によると東日本大震災で発生した災害廃棄物は推計1,880万トン、このうち79.2%に相当する1,489万トンは撤去済みだが、処理・処分が完了したのは291万トンで15.5%にすぎない。災害廃棄物は岩手県525万トンで、通常の一般廃棄物量

の約12年分、宮城県127万トンで、同じく約14年分、現地での処理能力向上と広域処理を通じて2014年3月末までの処理終了が目標になっている。東京ビッグサイト（東京国際展示場）の東棟全ホール（と隣接屋外）を使用した会場には595社が2,052小間を出展し、会期中に16万2,586名が来場した（前回は547社・1,842小間、15万7,905名、いずれも同時開催の地球温暖化防止展（第4回目）を合わせた実績）。

森林・廃木材関連の処理技術を中心に紹介したのは株諸岡（本社・茨城県龍ヶ崎市庄兵衛新田町358）、緑産（本社・神奈川県相模原市中央区田名3334）、東京ボード工業（本社・東京都江東区新木場2-11



屋内ブース、屋外ブースで林地残材、廃木材処理技術を紹介した諸岡



ー1)等の出展者で、その他ペレット製造技術を出展者が多かった。

屋外・屋内ブースの両方に出展した諸岡はバイオマス対応林内作業車、不整地運搬車、ふるい機、木材破碎機などの関連技術を紹介し、間伐材処理・廃木材のチップ化処理を向上する一連の技術を紹介した。とくに屋外ブースで紹介したバイオマス対応型フォワーダMST-650VDL/MST-800VDL、自走式破碎機MC-2000、自走式ロータリースクリーンMRS-24で構成する処理技術は飛躍的な向上が

期待される林業の現場を革新する木質バイオマス循環システムの中核をなすものとして実演に注目する来場者が多かった。

緑産は最大径560mmの大容量作業に適應する余裕のパワーを登載したウッドハッカー・メガ561DL、2軸大型木質破碎機クランボー、低速破碎で大処理能力と低コストを実現するユニバーサルクラッシャー・ターミネーター等を展示し、未利用資源を木質燃料チップ、ボード原料、製紙用チップなど有価材へ転換する次世代のバイオマスビジネスを提案

した。伐採樹木、倒木、間伐材、流木、林地残材など山林に点在する様々な未利用木質資源を均一破碎して大容量加工を実現する移動式大型チップ製造機・メガシリーズは従来の打撃系に比べ倍近い効率のピンチップの生産を可能にする。

合板製造大手のセイホクグループにあって廃木材からパーティクルボードを再生するシステム事業を手掛け、NEW環境展に連続出展を続けている東京ボード工業は製造現場の模型を中心にしたディスプレイに一新してエヴァボードの生産を分かり



高品質のピンチップを生産できる緑産のウッドハッカー・メガ